

志摩町歴史資料館平成十四年度秋季特別展

# 志摩の民具 式



衣食住と学・楽



志摩町歴史資料館

## 開催にあたって

平成12年度特別展『志摩の民具 ㊶』－農業・漁業・養蚕－において、志摩町の発展の基盤となった生業的側面にスポットを当て大変好評を頂いたのに続き、この度第2弾として『志摩の民具 ㊷』－衣食住と学・楽－を開催する運びとなりました。

今回の展示では、民具や民俗的事例を通し、家族間あるいは地域間の結束の強さを、また道具ひとつひとつに込められた人々の思いを紹介しております。現代希薄になりつつある家族の団らん・物を大切に扱う精神などを再考していただくきっかけとなれば幸いに思います。

最後になりましたが、特別展の開催にあたりまして、資料の提供・聞き取り調査等に快く協力いただきました皆様方に、厚く御礼を申し上げます。



写真提供：糸島新聞社

## プロローグ

自然と一体、つまり自然の恩恵に畏敬の念を抱き感謝しながら生きてきた時代にあつては、生活の中に無駄なものはひとつもなかった。木材・木切れは風呂やかまどの焚き付けに、生ごみは畑の肥料に、わらはわらじや蓑・俵にと、役目を変えて再びその使命を果たした。また、人々は物と自然の性質を熟知していた。だからすべての物の特性を最大限に活かし利用してきた。破損すれば手を加え繕い、物の命を長らえてきた。

それが近年、自然を無視して人間本位に振舞い、利便性を追求する使い捨ての時代へと変貌した。その結果、気が付けば自然破壊の著しい今日になってしまい、ひとつの物にこだわりをもって大切に扱うことも少なくなってしまった。

一方、このところ世間では田舎生活への憧憬からか、グリーンツーリズムが流行っている。またスローフードも見直されつつある。現代社会において情報と時間に追われながら生きる私たちは、閉塞感からの開放を、そして物よりも心の充足を求めている。ゆっくりとした時間の中で育まれてきた民具は、そんな私たちを優しい空気で包んでくれるだろう。視点をかえれば、単なるアンティークとしてだけではなく、先人たちの知恵と工夫が凝縮された「人間らしさ」の象徴として見えてくるようでもある。

# 楽

ラジオもテレビも充分になかった頃の楽しみといえば、毎年決まった日に神社の祭りなどと合わせて行われる興行芝居こうぎょうを見に行くことだった。前原の老松座・周船寺の朝日屋・今津の人形芝居のほか、豊前の中津組・四国の徳島組・芦屋歌舞伎しゅうなどもやって来た。青年会や消防団まわが主催し、各地域の常舞台や掛舞台で催された。新町には廻り舞台もあつた。この日はどの家でもとびきりのご馳走ごちそうを作つて‘わりこ’に詰め、家族そろつて出かけた。主催した人々は、自宅に役者らを宿泊させるなどして手厚くもてなした。



わりこ

昭和に入ると前原商店街近くに太陽・東映、その通りの約200m東に日の出館、計3つの映画館が登場し、糸島の娯楽文化の進展に大きな役割りを果たした。戦前の糸島高等女学生は、年に一度、先生に引率されて生徒全員で映画鑑賞に出かけるのが楽しみのひとつだった。昭和31年、新築した太陽・東映両館のこけら落としには、農繁期にも関わらず2日間で約8000人の入館者が押し寄せ、商店街も合わせて大いに賑わつたという。当時の映画の人気ぶりは、比較的手ごろな値段で見られる気軽さにも因つたのだろう。



老松座



太陽・東映

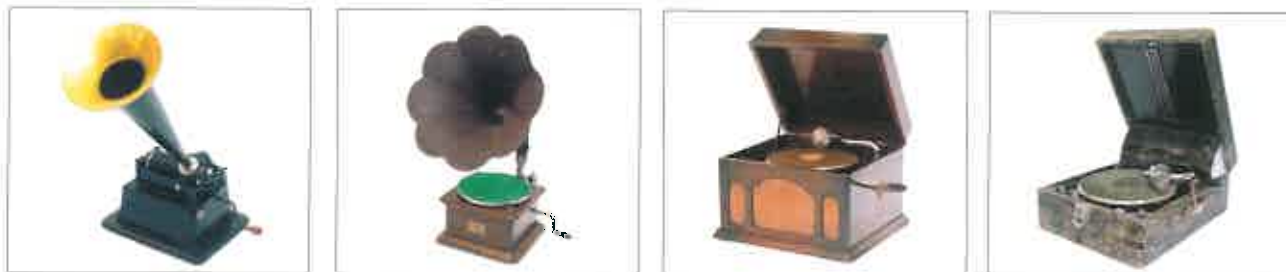


老松座に集まった人々の行列

写真提供：糸島新聞社

## 高嶺の花・蓄音機

19世紀末にトーマス・エジソンにより発明された。当初はレコード盤ではなく円筒に錫箔を巻きつけ、これに録音して再生させた。その後、蓄音機とってまずイメージするラッパ型のほか、箱型のポータブル式などが発売された。戦前、家一軒が買える時まで言われた大型蓄音機は、もちろん庶民には高嶺の花。花見の時などはポータブル蓄音機を持って行き、みんな集まって聴いた。



## ラジオの普及

手仕事をしながら耳を傾けることができるので、各家庭の日常必需品として急速に広まり、文化様相が一変した。昭和32年の糸島新聞によると、当時糸島郡内では1.4戸に一台という普及ぶりだった。音だけの世界ではあったが、相撲中継には子供から大人まで熱狂的に聴き入った。



## テレビの登場と反響

昭和31年、福岡でのテレビ放送開始に合わせ、糸島では毎日宣伝車が通り大変盛り上がった。しかし、当時大卒の初任給が1万円弱で、17インチのテレビの値段が13万円とくれば、庶民にはなかなか手が出せない存在であった。店頭での試験受像を見に集まった人々は「写った」「写らぬ」「声はするが姿が見えぬ」、また「ちょっと油断すると逆さまに写る」などと大騒ぎだったようである。

一年後の普及割合調査でも、前原で54台に対し、志摩町内ではわずか2台しか所有されていなかった。全国的には皇太子御成婚パレードや東京オリンピックを機に一気に普及した傾向にある。志摩町でもこの波に乗りつつも、近隣のテレビを持つ家に集まって一緒に見せてもらうことも多かったようだ。

当初のテレビは白黒画面でチャンネル式。居間の一番良い場所に置いて、見ないときは幕をかけるという扱われようだった。



テレビに釘付け（昭和34年・長野県）  
『毎日夫人』397より転載

## おもな展示資料

### 衣

蓑・半てん・どんざ・もんぺ・ローモコーモ・行李・火のし・鋺・炭火アイロン・電気アイロン・針箱・下駄・わら草履・わらじ・鏡台・かんざし・バリカン・手回しミシン・足踏みミシン

### 食

かまど(レプリカ)・箱膳・おひつ・エグリ・ママジョーケ・羽釜・臼・石臼・大根おろし・鰹節削り・ところてん突き・弁当箱・水筒・せんべい焼き器

### 住

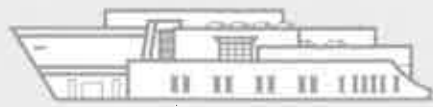
飯台・蠅帳・柱時計・灰皿・湯たんぽ・角火鉢・置炬燵・ランプ・扇風機・団扇・手水たらい・燭台・有線電話・蚊帳・箱枕・石炭風呂

### 学

文机・紙製ランドセル・そろばん・謄写版・始業ベル・万年筆・教科書・タイプライター・筆入れ・鉛筆削り

### 楽

ラジオ・蓄音機・白黒テレビ・レコードプレイヤー・レコード(SP盤・LP盤・EP盤)・カメラ



**志摩町歴史資料館**